
桜神の封印

小十郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜神の封印

【Nコード】

N0927C

【作者名】

小十郎

【あらすじ】

古い大きな桜の木（桜神）と若い桜の木が森の奥にあった。この場所は、昔、人によって火事が起こり、焼かれてしまった場所。先代の桜神は、人を憎みこの地を封印してしまった。若い桜の木は、もとのたのしい場所にもどきたい一身で現桜神にお願いする。そして、この地を復活させる。

人が踏み込めないくらいうつそうと茂った森の奥。

そこは、暑い太陽の日差しもほとんど届かない。樹齢百年以上の木々の葉が屋根のように覆いつくして居眠りしたくなるくらい心地よいあたたかさを作り出していた。

ここは春まつさかりなのだ。目の前の満開の桜を見れば、誰しもそう思う。七月の景色ではない。セミの声すら聞こえない。

満開の桜の木は、大きな古い桜と、若い小さな桜があった。

その桜の木には、ほんのわずかな木漏れ日が、スポットライトのように照らされている。

誰かに見てほしそうにして。

「母さん、私、人に会ってみたいな」

「どうしたんだい、急に……」

「だってさ、母さんはよく思い出話聞かせてくれるでしょ。その話をしてるときの母さん、とてもうれしそうなんだもの」

「そうかい？ でもね。会うことはもう難しいかもしれないね。先代の桜神様が封印してしまったんだからね。この場所を」

「そうよね。でも、母さんが今は桜神様なんですよ」

「ええ、そうよ。あの二百年前の火事で先代の桜神様が灰になってしまったときに、引き継いだのよ」

人の不注意で、森に火が放たれてしまった。それが二百年前。

先代の桜神様は、熱さと苦しさで人を憎み、この森を封印してしまったのだ。それ以来、人は訪れず、この場所も忘れ去られてしまった。

唯一の生き残りが、桜神様の後継者になった母さんだ。

今では、そんな火事があったなんて信じられないくらい青々とした森が存在している。

「母さん、封印とこうよ。母さんは、恨んでいないんですよ。あの

火事のことを。人のことを」

「まあね。でもね、そのためには、あなたに活躍してもらわなくちゃいけないわよ」

母さんは、枝をゆらせて笑っていた。

「いいわよ。なんでもやる」

その言葉を口にしたとたん、母さんは、体を大きくゆらし、風を起こした。

たくさんのお花びらが風に舞い、桜吹雪で目の前が見えなくなる。

「いくわよ。歯をくいしばりなさい」

グウオオオオー！

ものすごい突風が森の中を駆け巡り、小さな桜を取り囲む。

取り囲まれた瞬間、花びらの渦となり、一気に木々の間を光のように突き抜けていった。

「みつけたわ。あの子に入り込むのよ。あの子ならうまくいくはずだから」

「うん」

一人の少女、桜木麗奈が神社の境内に腰をおろした。

「ふうー、ほんと、暑くてたまらないわ。でも、ここは別世界ね。

なんて涼しいんだろう」

麗奈は、じんわりとにじみ出た額の汗をぬぐい深呼吸した。

「あれ、なんだろう？ なにか聞こえる」

何か近づいてくるような物音を感じた瞬間、麗奈は、急に眠気を感じ始めた。

なんでこんなに眠いんだろう？ 別に疲れることなんてした覚え

はない。なぜ、わからない。もうダメ、眠くてしかたがない。ここで寝てしまおう。

麗奈は、体の力がぬげ長い髪をダランとたらすようにして前かがみになった。意識がうすらいでいき、まぶたが重くなる。

遠くでセミがジジジジと鳴く声が耳に届くと完全に意識がとん

だ。

「ふうー、いつもながらこの階段はきくなあ」

ドラドラと汗をふきだしながら、姿を現したのは神社の神主、柎らぎんべい文平ぶんへいだった。

文平は、最後の段をひざに手をのせるようにしてやっとの思いで上がりきり、思いつきり息をはく。

「おや、なんだろう?」

文平の目は、境内に釘付けになっていた。小さな竜巻が砂ぼこりを起こし右往左往している。その中心には少女がぐったりとせずくまっていた。

それなのに、なぜだろうか?

周りの木々が揺れることなく妙に静けさを保っている。

少女のところに行かなければ。頭の中ではそう思うのだが、足が地から離れない。声も裏返ってしまいうまく出すことができない。まるで、金縛りにでもあっているかのよう。

文平の目には、目の前の光景がこの世のものではないように映っていた。

「文平さん? どうしたの?」

男の子の声が後ろから聞こえ、文平は振り向いた。

「ああ、なんだ。守じゃないか」

「なんだはないよな。それより、顔、青いよ。大丈夫?」

「ああ、それより、あれ見てくれよ」

文平は、境内を指差した。

「えっ、あれって麗奈じゃないの? 麗奈がどうかした?」

守は、不思議に思いつつ素っ気なく答えた。

さっきまで、渦巻いていた竜巻は消えうせて、麗奈が境内に座り込んでいただけだった。

文平は、何を言っているかわからなくなった。

「なんかおかしいよ。文平さん」

「うん、疲れてるのかな。でも、確かにさっきは……」

守は、文平の言葉を最後まで聞かずに、麗奈のもとへ駆け出していた。

「おい、麗奈、麗奈ってば」

守は麗奈の体をゆすって声をかけた。

「うーん、うまくいったみたい」

という声とともに、両手を高々とあげ麗奈はのびをする。

「はあー、何言ってたんだ。寝ぼけてんのかよ」

守は、麗奈の発言に苦笑いを浮かべていた。

すぐ後ろに、文平も来ていた。

麗奈は、二人をみつめた。目の前にいるのが人なのね。あつ、今は自分も人なんだったわ。心のなかで麗奈はつぶやく。

「大丈夫かい。気分でも悪いのかな」

文平は、やさしくたずねた。

「えっ、大丈夫よ。なんでもないわよ」

麗奈は、境内からポンと降り立ち笑ってみせた。この人優しいそう
だわ。

「じゃあさ、おまえ、なんでこんなところで寝てんだよ」

「いいじゃない。気持ちよかったんだもん」

麗奈は、うまくいい返せたと思った。

「気持ちよかったねえ」

守は、首をかしげていた。

「まあ、大丈夫みたいだし、これで失礼するよ。これでも忙しいんでね」

文平は、神社の中へ入っていった。

「ねえ、あの人優しいそうな目してるね」

「何言ってたんだよ。今さらさ。子供の頃から世話になってるだろ」

「えっ、そ、そうよね」

麗奈は、どきまぎして言った。

「変なやつ、どっかで頭でもぶつけたんじゃないのか」

と、守は言いつつ、長く続く階段に向かった。

「ちょっと、待ってよ。えーっと……」

彼の名前がわからない。どうしようかな？

「あのだ」

突然、守が振り返ったので、麗奈はドキッとした。

「もしかして、俺のことわからないなんてことないよな。五年一組のクラスメイト松田守のことを」

なんて、勘がするどいんだろ。麗奈は言葉につまっておしだまる。

「まさか、当たっちゃったか」

そういつなり、守は、麗奈の頭に手をおき、見始める。

「なにするのよ」

「どっか、ぶつけたあとがないかと思ってさ。ないみたいだけどな」

「当たり前でしょ」

「じゃあ、どうしちまったんだよ。今日のおまえ、ほんと変だよ」

麗奈は、話そうかと迷った。本当のことを。まだ、言いたくないもつと、いろんな人に会いたいらんだもの。ここで話したら、お母さんのところ戻らなくちゃいけなくなる。でも、この子、連れて行ったら封印とけるかも。うーん、どうしようかな？

「おい、麗奈、なにぶつぶつ言ってるんだよ」

「あつ、ごめんね」

ペロツと舌をだして謝る麗奈。

「まあ、いいか。あれ、俺なんでここ来たんだっけな……。そうだ。おまえのばあちゃんが探してたんだ」

「えっ、ばあちゃんが……」

どんな人だろう？ この子のおばあちゃんって。今は私のおばあちゃんってことになるけどね。

「いくぞ」

守は、階段を駆け下りていく。麗奈もあわててついていった。

階段を下りきると、公園があった。子供たちが走り回って遊んでいる。

木にぶら下がっている男の子に目がとまる。麗奈は注意しようと思った。枝が折れそうになって痛がっていたからだ。

でも、遅かった。

ボキッと鈍い音とともに、枝が折れて、男の子ごと地面に落下。

麗奈の心に怒りが込み上げてくる。ひどい、ひどいよ。と心のかで叫びながら男の子に近づく。とそのとき、怒鳴り声が公園全体に響きわたる。

「なにしてるんじゃ、この木に謝んなさい」

一人のおばあちゃんが、男の子を叱りつけた。

麗奈の怒りは、おばあちゃんの言葉でスウィーツとひいていった。

おばあちゃんと男の子のやりとりは、しばらくつづいていたのだが、男の子もおばあちゃんの話に納得がいったのか、「ごめんなさい」と木に向かって謝っていた。

その様子は微笑ましいものだった。

やっぱり、先代の桜神様は、間違ってるわ。こんな人たちともっと触れ合いたいもの。全員がいい人とは思わないけど、やっぱり、封印をとかなきゃいけないわ。

おばあちゃんは、麗奈の顔を見ると近づいてきた。

「おった、おった。麗奈に話があつての」

「えっ、私に？」

麗奈は、キョトンとした顔をしている。

「なに、不思議そうな顔してんだよ。さっき、言ったばっかじゃなかよ。ばあちゃんが探してたつてさ」

守が、言い放つ。

そうなんだ。麗奈のおばあちゃんなんだ。この人が。なんだか、

麗奈は、うれしくなった。

「それで、話つてのは？」

「それがの、こんなもの押入れの奥から出てきたんじゃよ」

おばあちゃんが、手にしていたものは、箱に入れられた古そうな本が数冊と小さな袋。

「これが、どうしたの」

守も気になって覗き込んで見入っている。

「ご先祖様が書いた日記なんじゃよ。この袋は、どうやら、桜の木の灰らしいんじゃない」

「桜の木の灰？」

麗奈は、まさか、お母さんが話していた火事と関係あるんじゃないかと思っていた。

「気になったところがあつたんじゃがの。まずは、ほれ、ここんところ」

文化四年四月十日

楽しい桜祭りになるはずだったのに。さっちゃんが死んじゃった。だれよ。火事おこしたの。

きつと、熱かつたろうに、桜のさっちゃん。

森がなくなっちゃった。小さな桜の木が一本だけ。

さっちゃんの子供の木。さみしそうだつたな。

さっちゃん、灰になっちゃって、私泣いちゃったよ。

袋に入れて、大事にするの。さっちゃんの灰をね。

いつでも一緒にいられるもんね。

みんなも、泣いていた。絶対、この森を復活させるって言った。

さっちゃん、天国でもきれいなお花咲かせてね。

私、残されたさっちゃんの子供とがんばるからね。

「そんなことあつたんだ。この森って神社の奥の森のことなのかな。ばあちゃんも知らないのか」

守は、遠い目をして考えこんでいる。

「知らないねえ。かなり昔のことなんじゃよ。文化四年ってかいてあるんじゃないからねえ」

「文化四年っていつ頃なんだろう？」

「江戸時代じゃなかるうか」

「ふーん、そうなんだ。それに、日記に書いてあった灰って、この袋に入ってるのかな」

麗奈は、二人の話に参加してきた。

「きつと、そうじゃろな。あと、こっちの日記、こんな写真がはさまっておつての」

おばあちゃんは、大きな桜の木に抱きついて笑っている女の子の写真を差し出した。

「すごいね。写真あつたんだね江戸時代にも。あれ、この子、麗奈に似てないか？」

守は、目を輝かせて興奮している。

すぐくうれしそうな顔。桜の木が好きだったのがよくわかる写真。似てるかどうかはわからないけど、なにか、運命を感じる。

麗奈と守は写真のはさまったところの日記に目を移した。

安政四年一月一日

初詣に、桜見神社に来てみた。久しぶりに、裏手の森に行ってみよう。そう思ったわ。

ところが、森への道がない。去年までは、あつたはずなのに。

確かに、年々、道が狭まっていたんだけど、まさか、道がなくなるなんて。木々があまりにも大きくなりすぎてしまったのか。桜の木を見に行くことができなくなってしまった。

残念でしかたがない。

火事があったから五十年、ずっと生き残った桜を見守ってきていたのに。去年は、りっぱな桜神様として貫禄がでてきたな、なんて思っていたのに。

もう、会うことができないなんて。寂しい。それしか言えない。

森は、もう私を受け入れてはくれないのだろうか？

「この日記、ちょっとにじんでいるね。もしかして、涙かな？」

麗奈は、この日記に心を打たれて涙をうかべていた。きつと、麗奈のご先祖様が書いたものなのだろう。それなら、この想いをぶつければ、封印が解けるのではないだろうか？

「なあ、神社の裏手に行ってみないか。閉ざされてしまった森の入り口にさ」

「そうじゃね。麗奈も行くじゃろ」

「もちろん、そのために私は来たんだもの」

「なんだって」

守は、聞き逃さなかった。麗奈の言葉を。

「二人とも聞いて、実は私、桜の木の精なの。麗奈の体ちよつとかりてるの。森の封印を解くためにね」

「封印？」

「そうよ。きつと、この日記の日に、森は完全に封印されてしまったのよ。火事の日から五十年かけてね。私も生まれる前のことだからはつきりとはいえないけどね」

守とおばあちゃんは、真剣な眼差しで聞いていた。

「二人とも、お願い、協力してくれるわよね。私だけじゃ無理なの。もしかしたら、この日記と桜神様の灰が役にたつかもしれないしね」

麗奈は、懇願し、おばあちゃんから日記と桜の灰を受け取った。

「うん、信じられないことだけど、麗奈の目見てたら、ウソじゃないような気がしてきた。俺やるよ。ばあちゃんもやるだろ」

「どんと、まかせんしゃい」

桜見神社に来ていた。麗奈と守、おばあちゃんも一緒だ。

「じつちよ」

麗奈は、ニコニコして道案内している。

守は、おばあちゃんの手をひいて神社の裏手に広がる森の前に連

れて行く。

麗奈が、立って指をさしている場所は、どうみても行き止まりだ。「ここよ。例の場所は」

麗奈は、真剣な眼差しで訴える。

目の前には、大木の根が何重にも重なり合い厚い扉を作り出していた。その根の上には、太い幹が空高くのび、入り込む余地はないように見える。

「もしかして、この先に桜はあるの?」

守の問いに、麗奈はうなずく。

「どうしたもんかねえ」

「うーん、この日記と灰どう使えばいいんだろっ」

守とおばあちゃん、それに麗奈は、顔を見合わせてため息をついた。

そのとき、突然、目も開けられないほどの突風が三人に襲いかかってきた。

「う、うわぁー、な、なにことじゃ。森が、騒いである。大地も揺れとる」

「れ、麗奈、そうじゃないや。桜の精さんどうにかしてよ」

「ふん、どうにもならんよ」

不気味な声がどこからともなく聞こえてきた。

麗奈が、空中に浮いている。そうじゃない、濃いピンク色のばかりでっかい桜の怪物に捕らえられているんだ。

「ここから先に行かせるか。にくき人間どもには」

「やめて、先代の桜神様。あなたは、間違っていたのよ」

「う、うるさいわ。小娘の分際で封印をとかれてたまるものか」

麗奈はギューッと体を締め付けられていく。

このままではいけない。桜の精は、麗奈から飛び出した。

そのとき、麗奈の手から日記と灰がポトリと落ちた。日記にはさまった写真と袋の中の灰が舞い上がる。

先代の桜神様は、すぐに灰が自分のものであると悟った。写真も

見覚えがあった。

しかし、われを忘れた先代の桜神様は、麗奈の体をしめつけるのをやめようとはしない。

このままでは、死んでしまう。そう思った守は、必死になって怪物と化した桜神様につめよった。

「おまえは、自分たちがよけりやそれでいいのかよ。忘れちゃったのかよ。ほら、この写真をよく見るよ」

守は、涙をボロボロ流しながら訴えた。

守の声に共鳴するかのように、麗奈の体がほのかに光りだす。

「さっちゃん、ど、どうして……そんなこと……するの。親友ですよ」

麗奈の口から悲しそうな声がもれる。

先代の桜神様は、ハツとする。なつかし声。守が突き出している写真と声が、頭の中で一致した。楽しい日々が思い出される。

「もしや、おはる？ おはるなのか」

先代の桜神様は、おだやかな顔になり締め付けていた麗奈をそつと降ろす。憎かったはずの人間が愛おしく思えた。遠い昔に遊んだ女の子の顔がそこにあつたからだ。

麗奈はそっくりだった。写真の女の子、おはるに。

「私は、間違いを犯してしまったのか？」

「残念だけどね。でも、大丈夫よ。封印をとけば、またもとの楽しい日々がやってくるわよ。みんなそう思ってるわ。きつとね。気持ちは一緒のはずよ」

おはるは、先代の桜神様をなだめた。

「気持ちは一緒……。みんな、すまなかった」

そう言葉を残すと、先代の桜神様は、おはるとともに天へと姿を消した。

重く閉ざされていた森の入り口は、なにもなかったかのように開け放たれた。

気絶している麗奈を守は、抱きかかえ、おばあちゃんと一緒に、

森の奥にひっそりと咲く桜神様に足を向ける。太い幹でどっしりと構えている桜が美しかった。

そのわきで、そよ風に枝をゆらせ、うれしそうにしている小さな桜がいたことは言うまでもない。

麗奈のまぶたが持ち上がる。それに、気づいた守が優しくつぶやいた。

「麗奈、見てみな。きれいだろ。こんないいところあったんだよ」

麗奈は、なんで守に抱きかかえられているのかわからないまま、ピンク色に色づく桜の花がヒラヒラと舞い散っているのを眺めているのだった。

夏の風が、この地に長い春の終わりを告げていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0927c/>

桜神の封印

2010年10月8日15時36分発行